源氏男女装束抄　下

765
.S6

765
S6

源氏男女装束抄下目録

○絵とのゝ世乃巻
はくちかさねのかざみ紅葉重ねおり物
青実乃表着(ウハギ)柳のかざみ
山吹かさねのあこめ
○し女の巻
六位の表衣　赤色乃唐衣
○まりつくれ巻
かい練りの衣　乃し花よへ

Freer Gallery of Art
Washington, D. C
7636

紅梅の表着　えびぞめの小袿
海賦(カイフ)乃紋　山吹の細長
柳の織物　白き浮文
濃(コキ)袿(ウチキ)　青鈍(ニビ)の織物

○はつ音の巻
赤くちなしの衣　山吹乃うちき
白き掻練(カイネリ)　青文に白かさね

○こてふ乃巻
なでしこの細長卯の花かさね

○ほたる乃巻
すそごのきちやう　菖蒲かさねのあこめ
あふち乃すそごの裳

○野わきの巻
女郎花かざみ　かられきをの人まう

○みゆきの巻
青色の表衣(ウヘキヌ)殿上の五位六位まで着たり
かりのよそほひえび染乃指貫
あをくちはの衣　紫のしろござりみゆる小袿

○梅かえの巻

紅梅かさね乃唐の細長

○藤乃うら葉の巻

二あゐの直衣　うすき直衣白き衣

丁子染　浅みどりの衣

青き赤き白橡(ツルバミ)

○若菜の巻下

舞人(マイウド)の装束　上達部のかくこめさ

赤色乃表着紅うちたる白き袙

青色の表衣　紅梅桜の表着あまたし

青鈍(ニビ)に柳のかざみ　柳乃おりもの裳

志ろかさね

○まぼろしの巻

色濃き井のさびらうる袴

萱草(クハザウ)色の草　小忌(ヲミ)青摺

○阿げまきの局

扨りし色乃氷とけぬかと見ゆる

○屋どり木乃巻

ものゝうへ　五つ衣の小袿

○うへの袴

濃打のきぬ　しびら

紫のうすやう　丁子染のおほやかなる直衣

○手ならひの巻

むらさき色の袴

○大うちき　　○小袿

○裳　各所尺寸

汗衫長凡後一丈五尺前一丈二尺袖各二のまて二尺二寸うらされ二尺三寸と雅抄よりんてうりかさそとあるにいと袴表袴とあるへし

源氏男女装束抄下

○絵にかゝせ　しも女巻三注之

わらハ六人ハあかいろふたへがさね乃かざミ

あこめ紅藤がさねのおり物なり

弁

かざみハ童女乃うへにきる物なり水干（スイカン）乃

うミれやうなるものなり赤色のうへをいへり

桜かさね乃かざミ紅藤かさねハうらか袙（アコメ）なり

あこめハ二も三もかさぬるものなり紅藤がさね

ハ面うらとも紫にて蘇木といふなり

青色の染式ハ
刈安とつるし紫を
にほどりあくに
いつる青いろは
麹塵のいろよ
なり

愚 藤重○女官餝抄曰表紫裏青

わかなハもえぎに（表着ノ色ナリ）柳のかさね

細流 あをいろハかりやすをむらさきにてさしたる
いろなり一本あをいろとありあをに（青丹若菜ノ所ニ注ス）なるハ
あをきえだに黄ばまじりたるなり柳
ハおもて白く裏青き織物ハ卯花（胡曹抄同之）
ともいふなり

山ぶきがさねの下がさね

細 表うすくちば裏黄なるをハ花（只山吹ト云）山ぶきさと

六位の緑乃袍
をいさきとも
いふ是ハ六位れ
浅黄を後世
ニ釈して緑
色に染かける
より緑の色も
亦浅黄なると
いふなるへし

六位の人直衣
をゆるす旧例
いまたかんかへを
定て知給の一
様なるへし

いふ。おもて黄ばうらくれなゐをうら山（胡曹抄同之）
ぶきといふ

乙女

あさぎ（六位袍）乃いやしきをかはうちへまいるをも
せぞ拘うぐりさるへをぞ見せちにおもつきく
ぷ緑しなとさ海っかれる色なるされて（直衣）
六位まで直衣をゆるさるゝ事ハ別段の事（弁）
なるかよりてさ海っいまるいろゆるされ
てとハいろのさだ乃う人の（袍）さぬハかし

主上の赤色の袍ハ嵯峨の御門の御時より内宴或野の行幸乃時の御衣なりとかや又一条の後の二部の袍ハ

ふるまひをいへる詞なり

又あかいろハ赤色の袍ぞたてまつれりける

ゆるされておほせられしよりまいり給なれハおほかし

あかいろを着する人ハ

一ゆるし色ハ人のさねの色なり主上と同し 又御幸ノ巻ニモ見エタリ

ゆかりとを一の公卿着たる内宴なと

乃時の事なり

愚

赤色或稱赤白橡○延喜縫殿寮式曰赤白橡綾一疋黄櫨大九十斤茜大七斤灰三石薪七百二十斤○同弾正式曰凡赤白橡袍聴参議以上著用○西宮記曰赤色主上及一上卿内宴時服之

赤くちばハくちばに紅をましへて染る色なり

赤くちばのうすもののかざみ

弄

一あかくちばハよのつねのくちばよりもあかきによりたる名なり

○うすもの

ぬ中ひとへなるハ織りにこねなとにて

花

かいねりハうすさくら色井乃こき乃

此註クハシカラサル故ニ下ニ注ス

小袖ハ式正の衣なれね共袖なるをいふ

かいねりハ表裏紅にしておもてハ板引裏ハそのまゝなるなり

ねりぬきをいふぬ中ひとへとハ小袖をいふ
やうのきぬかさねそへたるはうすき絹なと
さるへし

後稱念院殿装束抄曰助無智秘抄云搔練(カイチリ)と
ハ只裏も紅のかりうちの中重色かさ
なり○餝抄(リ)篇火色曰旁案(ミチカタ)火色皆練(カイチリ)巳似無等
差但如長寛記者以裏張可稱皆練歟
ぬきむとんめく抱
河
のしひとへ旧説小うちきぬさねといへりけや

まわりさねといふハうすくける衣なり。ひ
とへといふハうすきえ物をいふ枕草子に
そしれ花と人に對してそかしさ
うきどのしひとへハうすきものにて
かさぬるハ袷りたるをきぬとへの事に
てひとへこえたりひとをうすきにて
とかきそれはのしむとんとなすけるや
かミれをぬけといふるやうにてひとへ
と云ゆへゆるなり

ノ乚草ノ下ニ髮透ナリ

さねと織まれ法をこれ行えハうすさりのなり

えひ染といふは二つの心得あり裏表ともにえひ染といふ時は表すはうら花田にして紫と二つまとけうるなり或えひ染の指貫或裏えひ染といふ時うら紫なり此時ハ裏

愚 のうしとん○女官飭抄曰のうしとんハうる
うるはしききぬをいふなり
同上 和名抄曰釋名云無裏曰單
あをじいのいとやうしとんうたるにえび
染の御小うちき(空蝉ノ巻ニ注之)はまやう色あはいとすぐれ
たる
花 えび染をたゝて(胡曹抄同之)をいふ裏をかさなるを
いふ今やう色とハ紅梅のあかき方なり
よわき色なり末摘の巻に見えたり紅梅

表うけていふ又三色うきれあるは注あり

かさね花田を藍まてうちくそめたるなり

のりんうたるハうハぎ(表着)ハいまやう色ハ
かさねたるきぬのんなりし
けくらの御そ(赤ツム巻ニ注之)なにつやゝかなり(衣ナリ)ハより
花 さくらハ面(胡曹抄同之)しろくうらえび染なり(玉葛巻注之)かい
ねりハうちきかさねのいつやれをまたる
なりはやゝかなるハうハぎ(表著ナリ)くしさんなり
あさぎは田のういぶのりん(イ織抱)をうちきなかま
めたるれとおほけいやうなかねりいとこなま
衣 いろうぐしく

くもりなく赤き
とかきハうすき紅
なるよし三条家
の抄よ見えたり
又山吹花よハさね
乃色なりとかけ
きもなりしるき
るすあり

花 海部ハ大かたにみるや貝なとを紋ありける
文なり。うつさ花田なれハ白ひやうならぬ
ありしたハわりハ紅乃かいそめけり
くもりなく行つ紅よ。山吹比花の細長 前注之
花 やまふきさとハたれりてくちた。表黄なる衣
ありそてをやうふくもりなきうえといへり
屋なきさのゆりものゝは
柳 表白裏青又夏ハ卯花ト云 上よまさるせり
むめちおりえたき蝶鳥のとひちかひたるめた

一本よ白きふ
襟ふこ紅にや
うありにほひて
とかりあかれて
あさとかける
うたゝこ放一し

から白きさうぞくのごときかたにやてりかさねかさ
襟く
花 あろくさう紅さん乃おり摺ふこ紅うらえ織
かさねさるありおさといふハ小紫なり今れ
梅しらねまく海るハまさねびりのなりとお紅
むらさ紅のうちをるハ光り文ありてうれ
くしきありそまとも白にかさねもれハきさ
うくかるへきなり沖海よこうでいのうそ
こえとしてるおやまりしとおほえ侍り梅に

延喜弾正式の
文よりれハ支子
染のころハ禁色
ならてゆすさハ
ゆるし色と也
より志られて
河海説よりに
ちらさんと云ま
うもおハそよへ
からさるなり

打えだ綾あるこハ白きさんふ梅の枝てふ
色を織るなり
あをにびのおり色（衣なり）のくちなしぞせこけの紙尺
つき給ひて御まへにおりくちなしの衣（シヅ）
接りし色なりときく

花　葵巻ニ注之

まゆみハこちまれたる色なりくちなし染
のきぬ色尼（アマ）君のためさるこそふさはしくて
そつられより文（此説不審）ゆるし色ハ紅のうすき衣
なり出家の人もかさねのきぬに用る例

黄丹ハ皇太子の
御衣なり是ハ
綾一疋と紅花
大十斤八両と
支子一斗二升
にて染るなるよ
くちなし染の
ころハ黄丹に
まがふへしと也

けり河海よ黄なるゆるし色とのせとらす
又しも黄がちなるへうの只ゆるし色なり
うすくまを升しとみゆつきなり

愚　支子（クチナシ）染〇法曹至要鈔曰弾正式云支子染深
色可濫黄丹者不聴服用元慶五年十月十四
日宣旨云支子染深色可濫黄丹不得服用而
年来以茜（アカネ）紅交染尤濫其色自今以後茜若紅
交染支子者不論浅深宜加禁制者・案之著
件色之時雖禁制重近来之作法或称款冬色

著用之或号黄朽葉色著用之巳下男女任意
随望亦無禁制之○延喜縫殿寮式曰深支子
綾一疋紅花大十二両支子一斗酢五合藁半
圍薪三十斤

山吹の袿の袖ぐちいたくすきたるをとりい
でゝみせ
花 袖ぐちをそけるとハふるびたるをいふ
かさね衣色あせをうつろといへり
○もつ孫

青色の本名麹塵是名称なるく礼記にも見えて又延喜縫殿寮式に青白橡とあるも是也青色ハ其略名なるべし

むかしハ黒きハ称りのさびしくおり
よりひとかさね
花 くハねりハうすく玉葛巻注之ぬきかねのそりよりおり
かさねど入ハくろくなりおりさびしく
はりてさやくとおとんなり 鳴
あをきハかさねのいろあひ
をきれなんぞめるにぞ
花 青色ハ麹塵なとといふ腋あきの袍の衣 闕腋ヲ云
なり白かさねハ下重の裏表志ろく打たる
ものなり

卯花ハ表白うら青なり柳も同し但うの花ハ卯花の文をあや柳にハ柳の文を用なり

西宮記曰踏歌供奉人著無文麴塵闕腋白下襲半臂白石帯深履扇綿花白杖高巾子冠ナリ言吹振六位以綿褁面不褁 近代

○こてふ

なでしこれはうなゐにおのよろしき花のいろ 前注之
なるは小うちき 前注之

花 なでしこハ面紅梅うら青なり 胡曹抄同之 此あろ乃
花ハ卯月あれて卯のはなかさねをいふ
まやいろハ柳と同し

末濃ハいろくにあり或紫末濃或蘓芳すそご紺をそごあり

唐衣ハ女官乃上にきるなりうたさねおりはおりなりし

○かゝう

いまめかしきすそごれは几帳キチヤウをたてまつし
花 末濃とハ几帳のきぬひらの上ハしろくすそ
ハ紫或ハ紺に深くそめたるなり
はうぶうの孫乃にほひ 前ニ注之
花 菖蒲 さうぶかさねハ面あをくうら紅梅なり 胡曹抄同之
あふちのすそごれ裳。なでしこ乃まろ紫れいろ
しなかうさきぬ
花 楝 あふちハおもてうす色うら青なり。そそ 前注之

ろハ裏表も紫
めのなり唐衣
とあるハ小
うちきを着
るなり

こハすそをむらさきは深くしたるをいふなるし
なでしこハ面蘇芳裏青一説面紅梅裏青也
も花にかよへる色なり紫の名ハなで
しこれ葉ににかよへるかさねなりさる
らどハ薄(ウス)蘇芳とこのあをいつれまかし

愚 唐衣○和名抄曰背子(カラキヌ)形如半臂無腰襴之袷衣也楊氏漢語抄云背子婦人表衣也

○将王紀
をとかへし乃ハかざりん

西宮記臨時篇ニ藤花宴羅花文綾ノ敷物見て
より

河 女郎花ハおりてたてきぬ也黄なるいろ
ぬきハ蘇芳なり 胡曹抄裏青トアリ
唐 唐綾しかられ字まりんきうを出しろつき
いとしろき花しろく

花 花文綾ハきぬ乃文にける綾なり或説顕文綾(ケンモンレウ)
なり字んりんきやといふりおもしこまハ
夏乃直衣をいふ当時ハ穀(コメ)の竪文なる紋
用るなり大略れておしるすなり家よ出しろ
乃花とハ鴨頭草(ツキクサ)の花をいふ夏れ直衣

大鷹鷹飼も巻纓
ありかり衣なり
冠纓あつかし
こさかさらかなり

木蘭地乃きぬのさしぬきをとこうるし（弄花云指貫ノ上行縢ノ攅アテスルナリ）
見えさり。冠ハ巻纓して又餌ふくろ蚀
付たるなり

愚
西宮記曰鷹飼王卿大鷹飼者著地摺猟衣綺
袴玉帯鶏飼者著青白橡袍綺袴玉帯巻纓皆
有下重

同上
布衣袴○和名抄曰文選云振布衣注云此間
云獦衣加利岐沼

同上
摺文○法曹至要鈔曰御馬乗鷹飼舞人等之

山女のきにいつろ
蒲萄染の小袖
ハ裏表りけて
いふ今山陰ハ一
いろすていかり

臨時被聴摺衣之外不論男女先従破却

同上
木蘭○和名抄曰本草云木蘭一名林蘭注云
毛久良迩○僧尼令義解曰木蘭黄橡也

えび染乃御さしぬき。さくらのかさね。やなぎ（末摘巻注之）
あかくちさかひさうぞく（裾　花宴巻注之）

えび染のさしぬきハえびいろ乃指貫なり
事なり

愚
紫葛○和名抄曰本草云紫葛和名衣比加豆
良文選蜀都賦云蒲萄乱潰○延喜縫殿寮式

曰蒲萄綾一匹紫草三斤酢一合灰四升薪四十斤○衣服令義解曰蒲萄染者紫色之最浅者也○名目抄曰蒲萄染経赤緯紫○枕草紙曰一の人の御ありきの日まうでぞえびぞめの織物さしぬき紫なるハなか／＼色くめてふし花も糸も紙も紫の花の中にハかきつばたぞすこしにくきいろハめでたくみゆ

えびぞめのほうなかに一重おちくりとるや

えびぞめハ服者ならねども着る例ある也祝儀にハ似合ぬ色也

紫のさしぬきハ御かどハ赤橘異にゆるし色のものなりさしぬきハ同し家ハ

花 おちくりとハ色あかくうすき井のくちを入へるほう小袖さるといへしえび染ハ服者なるねと着する事勿論なり只えびいろと いへハ凶服なり

濃袴ノ色ニ云

𢙣 落栗○源語類字抄曰おちぐり色といふハ紅の色なり但紫色に黒をはしるとも赤きうしろ見えあるハ地の色小うちさ

此説不合

河 紫のこくさたるをいふ色なり或説あり

引用する河海の説本ノ書にハ注なりしかの書ともより見るべき敵地の小袖のいろをこそむ考へきなり

下地をうちはふよ深てぞ上を紅ゆそて淡くする
色なりとぞいふ此説ハ河海の説なりとはゆる
生地よふ志ゆる（葵ノ巻三丁ウ）所なり

○梅かえ

おもていろゝのうらの裏をかさねへる女
乃さうぞく
（花）紅梅のうらおり梅乃やそなるなり河海ふ
香れ侭そながらとありこのやまおるなる女の
さうぞくハ裳（モ）ゆろきぬぞへぬなとなり

直衣夏冬年齢の次第末摘巻ふくりしくもろしぬ

○萩のうら梨

なほしそのまりかろびよきあれ非参議（ヒサンギ）
乃ほどなふとなれまる人よそ二のあハよまれ
（花）直衣乃色夜ハうすき紺ハ二藍次まこそ花田
次ふ浅花田なり非参議ハ二位三位中将
なりとそいふ夕霧ハ宰相中将非参議
ふのゐそ二あゐハのまりうつくしく寝れで
あさ花田おもゐへしとのゆゑふなり
（大臣）ておくうすき浅きをしむ白さればそれうるめし

丁子染ハ香染ともいふなり或秘記曰兼元四年二月十四日入夜仲基入道来談云事知足院殿御著直衣以丁子染タル香帷著之

されとは

花 うちは浅直衣ハ花田なり。志ろきにてぞある（夏直衣）

かさねの衣なり

宰相殿ハをこし色なれはなれど。丁子染乃こがるゝまでしめるこそにほひやかなれ

花 すこし色ふかきハこきはなだなり。衣の縫ハかうばしさまでハなれをいふなり

愚 丁子染○細流曰丁子染ハかさねなり○源語類字抄曰丁子染香のくろき色なり

浅みどり紫の色を濃くそめてもあれもう
されどことにけさや

花 袍色ハ衣服令ニ一位深紫二位三位浅紫四位深緋五位浅緋六位深緑七位浅緑八位深縹初位浅縹也。深紫ハ紫三十斤にて染なり。浅紫ハ又斤にて浅くなり。深緋ハ茜に加紫。浅緋ハ茜ばかりなり。深緑ハ藍と刈安とにて染て、浅緑ハ藍と黄蘗とにて染る也。今世四位袍三位以上と差異なし。一條院

正暦以来四位以上も五位六位も皆位色みえたり

後撰集曰廃明朝臣中納言に成侍りける時うへのきぬをつかはすとて　右大臣
おもひきや君が衣をぬぎかへてこきむらさきの色をきんとは

正暦の比よりぞ此漫(ミダリ)になりぬ。小野宮
右大臣記に見えたり。又紫と始しつる称なり
かゝるは女工所乃やむごと定(ミイ)まるによりて
ところなり。此年に浅みどりとよ然るは
七位衣色なり。六位かるハ深みどり紫色
し。又二位三位ハ浅紫なるとあれ紫也
よめるハ一位の袍なる色なりけむ代言かと
みハ大概をとぞ以常の事なりし。其上
廃明参議乃中納言になる時。九條右大臣

袍をたまふとてよまれしむらさきとかゝる兄
君へる。京極中納言も参議従三位の時
むらさきの色こそまさりなしさき御代
のちしめける天乃羽衣こよめる後撰の哥
にかなつきしつるなり

愚
袍色雑深用度○延喜縫殿寮式曰深紫綾一
疋紫草三十斤酢二升灰二石薪三百六十斤
○浅紫綾一疋紫草五斤酢二升灰五斗薪六
十斤○深緋綾一疋茜大四十斤紫草三十斤

或人曰青白橡赤白橡各其色意ありてこれは染然して白橡の二字とらずに習ありとぞて

米五升灰三石薪八百四十斤。浅緋綾一疋茜大三十斤米五升灰二石薪三百六十斤以上綾染式。深緑帛一疋（六位以下無文）藍十圍苅安草大二斤灰一斗薪一百二十斤。浅緑帛一疋藍半圍黄蘗大二斤。浅縹帛一疋藍半圍薪三十斤。深縹帛一疋藍十圍薪一百二十斤以上帛染式

あをしろつるばみはさまざまつくりてずりたるえび染

花（前ニ雑染用度注之）

白橡は二色あり青は青色あるさは赤いろなりとのふ混るどさはへざるに此名を伝

こと伝又伝へには
まよりぬ最意
あるなり
此道の達人にある
べし

さるは此とんでぬるなりし事は舞童の装束をいへりとだは赤色にまいるの下かさね右は青色にえび染の下かさねなり野行幸に着たの時のひは赤色右は青色とさる御堂の事ふまるしと記ぬ河海にはらずざれは凶服の事と内裏なとて例との世られたり事にはかましろそゆるなり況水源抄の説は皆あやまれるなりや

○まろか下

位吉まての事なりに賀茂臨時祭の例をひきあへて舞人陪従の装束をしるのと

青摺とするには模(カタギ)にうり摺や餝抄にみえたり

山あゐにすれる竹のふし

花
賀茂臨時の祭舞人竹文青摺袍蒲萄(エビ)染下襲地摺袴合袴陪従桜襴文青摺袍柳色下襲白表袴合大口赤紐半臂忘緒引帯等各閇付云云

思
山あゐにてすれるなり○細流曰舞人の着る小忌とて青摺まてすれるなり○御即位大嘗會假名記曰臨時祭の舞人の着するをは青摺と名付大嘗会の時は小忌といふ小忌青摺は同しやうなれと裁縫のやう替れり

半臂は袍と下重の間にきる衣也又云半臂和字讀之和名抄みえたり然に或須人はんぴといつめてよむ習也とて拾遺愚草物名和歌半臂下襲とことはみぴとすむ事はかくもうるにやまぬぬ夜よちりつりきんとよそみのしもおぬるへし

同上(アカヒホ)
赤紐付青摺左肩事○餝抄曰赤紐濃打弁藕芳打也仁平三十一十九豊明兼長卿着小忌赤紐 著小忌右肩舞人は著左肩依袒裼也

同上(ハンビ)
半臂○同抄曰冬禁色之人襴羅薄物身濃打夏大文黒半臂 三重襷云之大文 不聴禁色之人冬平絹共色如常夏穀二藍半臂○同抄火色下重頭書曰半臂面 文小葵 小葵裏菱濃打或説淺黃色

同上(ワスレヲ)
忘緒引帯等半臂之具也○桃花蘂葉曰いつも色襴忘緒は薄物也してみえ付之云云

くさとめくハ右の肩とめくなり

此ハ十月すゞしのきぬにつかれハこのすゞかさね八裏ハうへしも蘇芳とめるく

又曰或抄云【引帯】近代半臂以小緒結なり。往古之例以大緒二筋結之今世知人少

もとめ子とハつるとまつくさつやうなるかんちめ

かさねにくなりまふすかひをかく是さうへ

乃きぬ小ずをうかさね。ぷえひ染の袖をふりう

てり。むらさきのさうくしるに紅のふえにこめ

袂のうちきぬぐれたる

花をいろかさね八云ハの下襲のいろぷえび波

る衣上人れ下襲をいふなり。紅乃あこめ袂

あをかりハ又蒲萄染も表蘇芳裏花田成へし

うちきぬとは紅梁の色にとりかしく

いつるなとなり

けふくへのうちすくれたる人々はらいろなり

桜のかさねうそいろれをり袍おこ紋うに

もんのうへれてり海乃うちたるさ海

細是ハむらさきのうへ紅童女の事也。末文ハ

うすき花のおもてハひとへといふまや

女御乃御きぬ──よそほひた

あざやかにおもひて末文にをいて見ざここ

おそしハ襖子也
となへさきれ

今按青丹の色ハ
文字のことくいふて
あをいろ也や
万葉集によめ
りそれこれも
いうは青丹よし
ならの都やこれ
やまとおもて

花 青いろハうすき紙なり 冷泉光注之
いとしれたるこゝちしかりて紅梅二人ぱさ
くら二人ぱおそしのかぶりゆく 青磁色ナリト見立ツウカチ々ノ説ナリ
花 紅梅 前注之 はくらハ表着なりぱはなしハかさねを
いふなるべし
宮乃御かしこみ色し――わらハのすがた
まうりハあらしふかくろうを也たまひぱはをふく
柳のかざみ
花 青丹ハうすきこのいろなり濃(コキ)青丹を黄ば

こゝのりぱはやふ
おもしいろんう
さめ桜しくくに
青丹ようしといへ
るもあれど表に
あハね色なり

紅のさげもふる
とハ多れさめ
ふかけろへし
貫物集に紅の

さゞとなり
花 柳のうすものゝ裳のそろかげなるひきかけて
桜乃 前注之 さねようにて桜の裳とんぬ紅の唐さ
まや柳乃さね色さ紀よかんてくら
がく人三十人ぱふハ志ろうさ○をきるり
花 白こさ下かさねをいふなり
○まほろし
紅乃さげくろ字をひさる袴火ぱういろ乃
ひとへぱとて紀まび多にぱ思さなどうましううす

台記別記久安四年八月廿八日女院仰曰故四條大后云著唐衣之時不著小褂著小褂之時不著唐衣是禮也詣神社及奉幣之時著唐衣不著小褂云云

なり衣よりハたけながく作ル其色不定只衣と同躰也裁縫いさゝか相替てうちきあり對して大褂と稱ス男乃装束にも女のものにもありて用ル之由衣草子のいへるごとし着る袍なり

小褂事

あるハ女乃宿直装束とて唐衣を着ざる時表着の上にかさぬる衣乃代りに着る褂なり之由承ハ入内抄に分明なり

或秘記曰女房装束裳尋常水文也如后宮桐竹鳳凰也不然和繪也所謂花鳥之類也

○女房装束抄

裳乃あしをろ長さ一丈おほごしひきごしうはぎかりもんちいさきあられくわん小ごしはおもひくれなゐ袍大やうハうらこきぬの袖より出しうちきの袖するがうしつまにもいとめぐをさ袍になりぬいものうへのきぬをきる時を犬腰ハ引腰ハうちぎかり袍ぎぬハ白とくれなゐの只かりやうちいさうるべし夜ハすゞしうちき

やうしそれとハむうりを付る事あり

織抱ぢくはそれをひとく文のうを抱ぞハ

大おびひさごぴやうハやうしそれ

ひさごつれかうさ　六尺五寸

おほおびのながさ　二尺五寸

小ごし　四尺三寸

中倍

かうへハおもくとなるへしぞハいつも

をおめうのとへしむとく歳ハ夜ハ記◯

里かさねてし

大おびのむろさ　四寸五分

小おびのむろさ　二寸五分

いりもをとうハぎしれ記しくきこゆり

本云

右一冊者依數寄懇望令附與藤原

祐梁畢

永正十四年二月七日　宗碩

源氏男女装束抄者連歌師宗碩翁所修輯也。觀其所註多據本花鳥餘情間亦用河海細流弄花之說是只碩翁抄管見之大概而未詳也爰江州鄉士渡邊氏康映最好此書問衣裳之名稱及其雜染之定式余答之從其前蹤位袍雜袍禁色晴褻等之裝分四時之色目粗述之然康映請補加本抄之後令以模而固辭不許有不

得止而元祿九年季秋鏤版成而暫行之爾後讀其書則家家之說註各自有異同於其所可取捨者闕而未論無識所嚮焉豈徒諜他人之餘唾而不有自味乎於是止其梓而不行于世也今刊改前版之偏塞或註于上而照下或註于下而應上擇其可取捨者折衷之使人識所嚮焉書成而後書林 親當 請重登梓余亦欲化前日

不可思議道人神應

之非。使其鳩工窃稱。恐余薄劣猶多所闕矣

有識君子補助其不逮。幸甚云爾

享保二丁酉歳初春上澣壺井義知著

源氏男女装束抄下終